

## 内分泌学ウィーク 2011 報告書

第 15 回日本内分泌病理学会・会長  
ウィークコーディネーター

虎の門病院 山田正三  
自治医科大学医学部 屋代隆

2011 年 11 月 22、23、24、25 日の日程で、東京都千代田区の都道府県会館を会場として、三つの内分泌学系の学会を同じ場所で同じ時期にリレー開催する「内分泌学ウィーク 2011」が行われた。

内分泌学の研究に従事している研究者、特に若手の研究者のあいだでは、自分が主として活動している学会以外の他の関連学会に参加してみたいという希望が多い。しかし、これらの学会は毎年異なった時期に異なった場所で開催されるため、複数の学会の参加することは困難である。関連する学会を同じ時期に同じ場所で開催すれば、参加者の利便性を高めることができる。さらに、合同学術集会ではない「ウィークリレー開催」であれば、それぞれの学会の独自性を尊重することができる。このような趣旨のもと、本会は自然発生的に発案され実行に移された。

2008 年ごろ、当時の日本神経内分泌学会理事長須田俊宏先生、日本内分泌病理学会理事長（故）佐野壽昭先生、日本比較内分泌学会会長筒井和義先生に趣旨説明をさせていただいたところ、全員から全面的な賛成の意を頂戴し開催が内定された。各先生方とも、それぞれの学会の活性化の一助になるのではとの期待を持たれていたようである。もちろん他の内分泌系の学会へのお声掛けも行ったが、諸般の都合で三学会のみでスタートすることとなった。その後、各学会で早めに大会長を決めていただき、最終的に第 36 回日本比較内分泌学会（竹井祥郎大会長、東京大学大気海洋研究所）、第 15 回日本内分泌病理学会（山田正三会長、虎の門病院）、第 38 回日本神経内分泌学会（加藤幸雄会長、明治大学農学部）の三学会で内分泌学ウィーク 2011 を構成することとなった。ちなみに日本内分泌学会、日本下垂体研究会の後援をいただいた。

開催地は東京で、早稲田大学国際会議場や明治大学アカデミーコモン等の安価な施設を利用、等の基本事項を確認した。実際は、日程等の問題があり「都道府県会館」を会場とすることとなった。自治医科大学が関係する施設であり安価で利用可能であること、立地条件が良いこと等がその決定の理由である。会場費が浮いた分で学会参加登録費をできるだけ安くすることとした。当初より、1) 一つの学会に登録すれば全ての学会に参加可能とする、2) 合同シンポジウムと懇親会は合同で行うが、他のプログラムはすべてそれぞれの学会でおこなう、3) プログラム集・抄録集はそれぞれ独立して作成するが、総合プログラム、総合ポスターは統一のものを作る、等と合同学術集会ではない各大会の独自性とウィーク開催であるが故のメリットの二つを同時に求めて計画を立てていった。

その後、自治医科大学の大学院プログラムとジョイントして国際シンポジウム「内分泌

器官と幹細胞 ―組織発生と腫瘍発生―」をウィーク内で開催することに成功、外国から著明な演者を招待することが可能となった。各大会長の推薦で招待演者を決め、また各大会長が司会を務めた実質上の合同シンポジウムである。

さて、参加登録者数は比較内分泌学会が計 204 名、内分泌病理学会が 106 名、神経内分泌学会が 178 名、と例年と比較し増加した。発表演題数・講演数もかなり増加していた。国際シンポジウムにも 200 名近い聴衆が集まった。開催地が東京であったことのみならず、やはり内分泌学ウィークとして各学会がリレー開催されたことが参加者の利便につながり、参加者数の増加に貢献したのではないかと判断される。これらの結果を参加各学会で総括していただきたいと願っている。3-4 年に一度くらいのウィーク開催は、各学会ないし各会員にとって有意義なものになるのではないかと考える。